

根拠地の反戦同盟をめぐる境界認識

殷 志 強

はじめに

中国における反戦同盟には、国民政府支配地域にある鹿地亘を中心とする日本人の反戦同盟と、延安やその他の共産党に影響された抗日根拠地で発展した諸反日同盟支部の二潮流がある。本稿では、主として日中戦争期における根拠地の反戦同盟の活動を探ることにより、敵に対する宣伝をめぐる文化心理的な境界認識を検討する。

反戦同盟の組織や活動について、これまでさまざまな研究が積み重ねられてきた^{*1}。しかし、時局や戦況の変遷に伴う日本兵士の心理的な変化や、その変化に対する反戦同盟の対応についての研究はほとんどない。そこで、小稿では反戦同盟が直面した言語の壁、国境の山、文化心理的な溝という三つの側面に即して、「帝国軍人」がいかにして「反戦の闘士」へと変身したかを考える。これらの分析により、反戦同盟の活動の裏面における中日両国の間の分岐や誤解などが、どのように克服されたかを探りたい。

1 言葉の壁を超える努力

中国共産党の日本軍に対する政治工作は、日中戦争勃発の直後から始まった。1937年9月25日に「中共中央から日本陸海空軍に告げる宣言」^{*2}と「八路軍の日本兵士に告げる書」^{*3}を公表した。さらに朱徳と彭徳懐連名で「中国国民革命軍第八路軍総指揮命令」を出した。この三つの文書の経緯及び内容については、すでに井上久士の研究^{*4}に詳しい。井上は、これらの宣伝が「反戦運動と侵略戦争の敗北・日本の革命が区別されておらず、日本兵士の中ではほとんど皆無に等しい共産主義者以外に対しどれほどの効果があったのか疑わしい」と指摘した。ただ問われるべき課題は他にもある。たとえばなぜ共産党は、日本軍閥と、兵士である労働者を単純に分けて対応したかをめぐる問題である。その理由は、共産党の一貫した政治イデオロギーや政治工作の方法にあった。軍閥・財閥・地主・資本家・労働者などのいくつかの階級に分けて闘争を行うのは、国内における共産党の一貫した指導方針であった。捕虜優待方針は抗戦期に新たに定められたわけではなく、紅軍の時期に国民党軍の政治瓦解工作の一環として導入されたものである^{*5}。盧溝橋事件直後の日本軍に対する宣伝は、この指導方針の延長線上にあった。日本という新たな作戦相手に即して策定された戦略ではなく、国共内戦期に採用されていた宣伝手段の継承にすぎなかったと考えられる。従って、宣伝の効果はほとんどなかった。抗戦の最初の2年間に、日本軍のなかで投降する兵士は一

人も出なかった。華北において投降する偽軍兵はいなかった*⁶。

言語の壁は、政治工作のもう一つの重要な障害であった。八路軍は、平型関戦闘の前に敵軍の数千人を捕虜にできると楽観的に考えていた。しかし「一度開戦スルト敵兵ハ意外ニ頑強ニシテ我が軍包囲下ニ後方ハ中断サレ我が軍ハ山頂ヲ占領シ有利ナル地位ヲ占メ国内戦ノ経験ニ基キ大声ニテ「我が軍ハ諸君等ヲ打タズ」ト呼び掛ケタルモ言語不通ニテ捕虜トナルヲ恐れ頑強ニ抵抗シ多数ノ負傷兵ヲ出」したという*⁷。第115師長の林彪は、「敵軍ハ敗退負傷シ尚銃ヲ持セルモノ決シテ勇敢ナル者ニ非ズシテ我が軍ノ捕虜トナリタル後ノ殺害ヲ恐レル者ナリ」と分析した。その後各部隊に「捕虜ニ対シテ日本語ヲ以テ話シ危害ヲ加ヘズ優待ス」*⁸るよう命令した。

戦地から得たこのような貴重な経験に基づいて、八路軍の対日宣伝工作は大きく修正された。日本語による宣伝方針がたてられた。戦場において日本語で呼び掛けられるよう、兵士に簡単な日本語を習得させた。従来は日本語教官が不足していたので、日本語の教育は不徹底であった。そこで中日二か国語で書かれた捕虜優待命令の小型「パス」（通行証）を戦地に散布した。1940年4月、共産党中央は「敵軍瓦解工作に関する指示」*⁹を公表した。対日宣伝工作による抗戦や日本国内の革命の重要な意義を再認識し、組織の健全化と人材の育成を強調した。同年6月、八路軍総政治部は「日本軍捕虜工作に関する指示」*¹⁰を各部隊に伝えた。その中には、過去においては日本人の補助がなかったので、対捕虜工作が難航していたとの指摘がある。日本人捕虜を活用し、彼らに日本語の教育やピラの起草などを担当させるよう要求した。7月に総政治部は、「日本語訓練隊の成立に関する経験」*¹¹を総括した。一年間の訓練を経て63%の學員が会話レベルに達し、78%の人が作文や翻訳が出来るようになったと、その成果を確認した。訓練隊員の選定や教材・教授方法等の経験を各地の日本兵への対応の参考にさせた。

一方八路軍総政治部は、宣伝方針を変更しただけではなく、政治工作における人事の調整にも着手した。日本軍に対する宣伝工作は、それまで八路軍総政治部の宣伝部内の敵軍工作科に任せていた。劉国霖の回想によると、科長を務める劉型は国民党の軍隊に対する政治工作については理解していたが、日本軍に関する知識はなかった。日本語も解さなかったので、実質的にはたいした活動はしていなかったという。1939年頃、戦況が悪化し、敵軍工作の重要性が問われるようになると、敵工作科は格上げされ、総政治部の敵軍工作部として新たに設置されることになった。これを機に、日本をよく知る前線の野戦政治部敵軍部長だった台湾人の蔡前が敵軍工作部長に就任した。1940年3月、ソ連から延安に来た林哲（野坂参三）が敵工作部顧問に就いた。間もなく京都帝国大学卒の王学文が、蔡前に代わって部長になった*¹²。

野坂は延安に到着して間もなく日本人反戦同盟延安支部の成立を提案した。7月に根拠地では初めての延安支部が発足した*¹³。同時に、中共宣伝部は各級宣伝部門組織の健全化と工作の充実に関する決定を配った。党内において「組織を重視、宣伝を軽視」する誤まった

思想傾向を是正し、宣伝の内容を具体化し、宣伝機構を健全化することを求めた^{*14}。10月には総政治部の「捕虜を持って捕虜を改造する」という指示により、日本労農学校が創立された。労農学校は、その後の反戦同盟の闘士を育てる揺りかごになった^{*15}。大量の日本人捕虜はここで再教育と改造を受け、捕虜から反戦同盟のメンバーへと変った。日本人の角度から日本軍に対する宣伝工作について様々な提案を出し、大きな役割を演じた。1944年、総政治部は「敵軍工作に関する指示」を出し、今後の敵軍工作には新たに成立した日本人解放連盟に任せ、各政治部門は方針や戦略の問題しか触れないと決定した。

2 国境を超える国際的な感情

日本反戦同盟のメンバーには、戦争の長期化のなかで、中国人とともに、多くの日本人や朝鮮人も参加した。彼らはファシズム戦争への反対を主な目標として結集し、同盟の旗のもとで戦った。そのうち日本人のメンバーは、過去の自分と決別して思想や信仰を変えるだけでなく、昔の「敵」と連携して国の方針に背く行動を取らなければならなかった。彼らは日本軍部に軽蔑され、「不逞邦人」や「売国奴」といったひどい罵詈雑言を浴びせられた。彼らがどのようにしてファシズムの陣営から身を引き、また脳裏にある「忠誠心」や「愛国主義」を捨てて、国境を超えることが出来たかを考えよう。

反戦同盟の一つ重要な任務は、シュプレヒコールであった。過去八路軍は陣地の前で日本軍に呼びかけたが、あまり効果はなく、失敗することが多かった。そこで反戦同盟の兵士は「事前に調査しておき、標的のトーチカの状況を理解した上で、約50メートルから100メートル近くの距離からやる。始めにまず歌を一回歌い、または口笛を一回吹く、然して後に呼びかけた」。そのように順を追って進め、トーチカ内にいる兵士を驚かせないようにいろいろ工夫をした。しかし「シュプレヒコールの特徴は通信と異なり、直接に話をして、互いに問答できることである。全トーチカの人がみな聞くことができるが、危険性は比較的大きく、また常に口論になってしまった^{*16}」。トーチカ内の兵士は、反戦同盟を売国奴と罵ることがしばしばあった。ほとんどの日本人兵士は、少なくとも1940年の時点では日本が戦争に負けることを信じていなかった。例えば、反戦同盟冀魯豫支部の水野靖夫の回想録によると、当時の兵士は自分が従事している「神聖なる戦争」をまったく疑っていなかった。水野は、日本がいつの日が敗れると分かったが、実は負けてほしくない気持ちもあったという。とても複雑な心情を抱きながらシュプレヒコールを行ったことがわかる^{*17}。

和田真一は捕虜になってから後に、本気で反戦活動をやるまでの経験を詳しく語った^{*18}。捕虜になった最初は、死ぬのか生きていけるのか非常に苦しんだ。知らないところで「捕虜」や「弱虫」の恥を背負って、まるで犬のように死ねば、死んでも死にきれない。そのように自分を責めるなかで、日々を送っていた。しかし軍隊生活の不愉快さ、長官にいじめられたことを思い出すと、徐々に冷静になった。自分は忠誠心を持っているが、一旦捕虜になれば

「売国奴」になり、しかも軍事裁判にかけられるのはあまりにもおかしいことだと思えるようになった。その後彼は八路軍の第六区司令部所在地野県に送られた。ここで八路軍の捕虜への優待を体験した。しかし生活の面で優遇されたとはいえ、日本軍や日中戦争に対する認識がすぐ変わった訳ではない。そこで出会った中国人の兵士と、よく戦争勃発の原因や戦争の正義などをめぐって論争を繰り返した。和田は、「中国人の抵抗があるから日本軍が民間人を殺す」とか、「華北の権利を守るため、日本のアジアにおける主導権を握るため戦争をする」とか、「大東亜共栄圏やアジア諸民族の解放」などと主張した。中国人の兵士は、頑固な和田を説得するために、反戦同盟の宣伝ビラや政治理論の本等を勧めた。しかし和田は、ほとんど理解できないので読む気がなかった。しかも八路軍の捕虜優待政策を利用して潜伏し、必要な情報を収集してから逃げようと計画した。日本人の反戦同盟メンバーは、みんな死ぬのを恐れて八路軍の指示に従っていると思っていた。和田は、ようやく反戦同盟から仕事を依頼された。彼は密かに地図を暗記し、キャンプ地から逃げた。その後再び逮捕された和田は、八路軍の政治部や反戦同盟の古参メンバーに批判された。だが相変わらず同盟への反抗心を抱いていたので、同盟と「冷戦」を続けた。太平洋戦争の勃発が和田に大きな衝撃を与えた。アメリカと戦争するようになった日本が負けるのは、そう遠くない時期だと思った。和田の頑固な心が徐々に変わった。日本が負ければ、反戦同盟とともに生きて日本に戻れると確信した。そこで和田は、本気で積極的に反戦同盟の活動に参加し、国際友情のもとと一緒に戦うことにした。このような和田の事例は、当時の日本人捕虜において、単なるひとつの事例ではなく、典型的な意味を持っている。この過程は捕虜改造の難しさと日本兵士の特質を生々しく語っている。

和田のような元々頑固な兵士に比べて、八路軍の国際友愛に感動し、反戦同盟の活動に全身全霊を打ち込んだ中村哲夫のような人物もたくさんいた。大多数の日本兵士と同様に、中村は軍の教育を受けて、「八路軍は匪賊だとか、野蛮な土匪とか」という悪いイメージを持っていた。しかし、八路軍と反戦同盟は国際精神に基づいた国際友愛で結ばれていた。八路軍は反戦同盟の人々に対して、生活の面倒や健康を気遣って様々の世話をした。例えば「食べ物において我々の習慣的米飯を色々の心尽くしを持って心配してくれ、被服にしても高級幹部服をも圧倒するが如き特種の優良被服であり、毎月支給される手当金は絶対的優遇で一般的八路軍兵士の五倍以上を超えて居り」と記されている。八路軍の優待に応じて、反戦同盟は「日本語歌謡の紹介指導とか運動方面の紹介指導などを以て国際友愛の一端に替えて居るのであるが、八路軍と肉親、兄弟以上の親愛を以て固く団結し同一の闘争目標に向かって邁進し」という^{*19}。これが反戦同盟と八路軍の国際的精神の出発点であった。

前述した兵士は自らの立場からいかに国境線を超える経験を明らかにした。それに対して晋察冀支部の小林重一は、理論的に反戦同盟の正当性を証明しながら、八路軍との連携の重大な意義を強調した。小林から見ると、まず、「武力を持って他国の独立権を侵す日本帝国主義者の行為は野蛮であり、また不正義である。これと正反対に国の自衛のため戦っている

八路軍は中華民族の解放を目標としたのではなく勤労日本人民は勿論延いては全世界の人類平和の擁護と被圧迫的にある全世界の弱小民族の自由解放を唯一の目的」としている。また、「日本の統治階級者の如き人騙しの性質に対して八路軍は日本兵士の異民族的偏見と隔離的観念を根底から取り除いて反戦同盟との密接な連携をはかり真の東洋平和を建設しよう」とした*²⁰。従って、偏見的民族観を捨てて不正義の日本軍国主義との関係を断絶し、「敵」である正義の八路軍と連携することは売国ではなく、日本民族の運命や東アジアないし全世界の平和のための重大な使命である、と考えた。

このような文章はただの政治宣伝であると思われがちであるが、真の国際友愛こそ反戦同盟に勇気や知恵を与えたことは事実である。広い国際精神の励ましにより国境を超え、偏狭な愛国心を克服することができた。このことも戦争という特別な時代における特徴であろう。

3 文化心理の溝を埋める知恵

日本ファシズム政権を倒し、日本の侵略戦争を中止することが八路軍の政治宣伝の大きな目標であった。八路軍は、この目標を達成するために、日本人兵士とファシズム軍閥を離反させ、日本軍隊内部に変化を起こすことを必要としていた。

前述したように、共産党の最初の戦略は反戦同盟の日本軍を二つの対立の階級に分けて、日本国内における階級闘争に期待していた。中国を侵略し、略奪するファシズム軍閥は打倒すべき対象であり、日本兵士の大多数はファシズム軍閥に騙され、強制に動員された労働者であり、団結すべきである、と認識していた*²¹。

このような考え方は抗戦初期の政治宣伝に大きな影響を与えた。宣伝の手法としては、政治を強調し過ぎてしまい、日本文化や日本兵士の心理については注目しなかった。長い間延安で敵軍工作に携わっていた劉国霖は、抗戦初期の宣伝について以下のような回想を残している。

1938、39年頃は内容があからさまというか露骨というか、「打倒日本帝国主義」「日本ファシスト政府」だの「国際的被圧迫者解放精神」だの、左翼色の強い文言が記してあり、そのようなビラは日本兵士の反感を招くだけで少しも効果をなさなかった*²²。

たしかに、戦争の初期段階の共産党は、日本に対する宣伝の経験がなかったので、非常に多くの欠点が見られた。例えば、要求が高すぎて煽動性が大してなく、兵士が見ても分からないものがあつた。文字も「中国化」した日本語を使うことがあつた。新聞も、新華社の通信をそっくりそのまま載せることがあつた。それらは日本兵士の反感を惹起した*²³。

このような状況を自覚し、共産党は対日本軍の宣伝工作の欠点を克服するために、とくに以下の三点を取り上げた。

- 1 宣伝は政治化し過ぎ、また空洞化・公式化している。日本兵士の覚悟程度より高い

要求をしたので、宣伝の内容は日本兵士の心を動かすことはできず、逆に彼らの反感を買うことになる。

2 宣伝の文字は自然な日本語ではなく、中国語式の日本語であり、文法的誤りもある。

3 政治宣伝機関は数量を重視し、宣伝の質や効果に関心が弱い。^{*24}

宣伝の内容を、主に日本軍兵士の情緒を把握し、敵軍兵士の反戦や家族への思いなどの感情を刺激し、戦闘意識を弱めることに集中することにより、敵軍の部隊を瓦解することが出来る、とした。

具体的宣伝手法の変化については、以下の資料がある。1942年7月、在中華民国北京大使館参事官である土田豊は、共産党側の反戦宣伝の情報を収集した結果を外務大臣東郷茂徳へ報告した。これは定期的な報告であるが、その中でいくつの新たな変化が見られると日本政府に注意を呼びかけた。第一は、反戦同盟各支部が徐々に統一されたことである。太平洋戦争の勃発という新情勢を利用して、対日宣伝がさらに強化された。

敵側ノ反戦宣伝ハ客年来各地ニ邦人反戦諸団体支部ヲ結成シ「反ファシズム統一戦線」結成ニ狂奔シ其ノ暗雲漸次熾烈化シツツアリ特ニ大東亜戦争以来東洋ニ於ケル英米勢力徹底的撃砕セラルルヤ敗戦ヲ糊問塗セントスル敵ハ事実無根ノ逆宣伝ニ躍起トナリ日本兵士及在留邦人ニ対スル反戦赤化宣伝ハ益々積極化ノ傾向ニアリ^{*25}

第二は、共産党が宣伝の方針を変え、もっと日本の国情に即して兵士の心を動かす手段を取るようになったとする。かつての対日宣伝物は、政治の原則を強調したり、中国の立場に立って作成されることが多かった。しかし現段階においては、真に日本の国情に合致し、日本人兵士の心理をよく知っている反戦同盟の日本人メンバーが自分たちの心理と感情に基づいて宣伝物を作成している。日本兵士の心を感動させることは、難しくない^{*26}。

こうした方針転換によって、一連の優秀な宣伝が登場した。「晋察冀日報」、「前進報」、「日軍の友」などの新聞にそれらの宣伝が掲載され、在華日本人や日本兵士に衝撃を与えた。日本人反戦同盟のメンバーは新しい宣伝の取り組みに、大きな役割を果たした。

彼らは従来 of 宣伝に見られた政治化・原則化・中国的色彩を一掃し、日本の国情に適した、兵士の心を汲みとった、日本の国情と日本の民族様式に適した宣伝物を大量に作成した。晋察冀支部の経験によると、反戦同盟の取り組みが宣伝物を作るときに欠かせない存在であったことがわかる。

例えば詩を書く場合、中国人が書いたものがどんなに熟達したものであったとしても、日本軍の心理を理解しない人が書いた詩を日本語に訳出しても、日本人の同志の感情のこもった詩と比べて、やはり真実みのない、心を動かすことのないものとなる。豊かな感情を込めながら激しい煽動的な宣伝物を書くときでも、まず中国語で書き、それを日本文に翻訳した場合、同様に味わいの異なるものになるだろう^{*27}。

反戦同盟の指導で作られたもう一つの宣伝物は慰問袋であった。慰問袋は日清戦争時から流行した。軍属や一般民衆は、兵士たちの好きなものあるいは必要なものを袋につめ、前線

に送った。兵士を慰労するために作ったものである。日中戦争の初期に、日本から中国の戦場に送られた慰問袋は相当多く、内容も豊富であった。しかし、戦争が泥沼化するとともに日本国内の民衆は日常生活に苦しむようになり、慰問袋の送付は徐々に減少した。そのためふるさとの味や家族の慰めを望む兵士たちは精神・物資両面で余裕がなくなり、いっそう寂しくなった。反戦同盟はこれを日本兵士との精神交流のチャンスと見て、1942年頃からトーチカ内の日本人兵士に慰問袋を送り始めた。そのようにして日本兵士に近づき、友たちになる機会を探し続けた。慰問袋は、電話、大声の呼び掛け、通信、ビラ等の工作の効果を相乗させるきっかけにもなった。

しかし慰問袋は、日本文化の様々な面に関わっているので、日本の文化や風俗や習慣に詳しくない人が作ると、逆に相手を嫌がらせることになる。そのため反戦同盟は、慰問袋を作る際に必ず座談会を開き、袋の中身や様式や送り方について詳しく検討した。晋西北支部同盟員が語った経緯を紹介しよう。慰問袋の内容が決まると日本人全員が動員され、中国の美術家も動員された。しかし中国の美術家は、必ず日本人の「厳重な監視下」に作業をしなければならなかった。日本の風俗や習慣を知らない美術家は往々にして貧しく苦しい生活をしている兵士の妻を芸妓として描いたり、男の服装を女に着させたり、富士山を背景に関西の情景を描いたりとちぐはぐになって、笑い話になってしまったという^{*28}。晋察冀支部の劉鉄男も、慰問袋を作った経験を次のようにまとめた。

慰問袋を作るのに反戦同盟の援助がなければ、その慰問袋の大きさが分からないので、出した後で相手に不愉快さを感じさせ、彼を侮辱したと思わせるかもしれない。また、一枝の桜の花か一人の日本の典型的な女性を書く場合、もしも彼女の着物や風俗を知らなかったり、詳細に検討しなかったなら、必ず相手に笑い飛ばされたり、軽蔑されるだろう。^{*29}

それゆえ反戦同盟は、日本軍に対する宣伝活動の改良に苦心を重ねた。彼らは、宣伝物の形式と内容において大きな改良を加えたばかりでなく、宣伝活動の指導と技術水準の向上という点でも貴重な貢献をした。たとえば晋察冀支部は、日本兵士に反戦宣伝の目的で慰問袋を送っているという印象を弱めるために、慰問袋に反戦や革命のビラをつめないことにした。そのかわりに、厭戦や反戦を暗示する歌の本や、漫画、さいころ、トランプ、カルタなどの娯楽品を入れた。兵士は遊んでいるときに反戦同盟のことを思い出すと考えられた^{*30}。

おわりに

反戦同盟は日中戦争期における特別の歴史を作り、正義と平和のために様々な困難を乗り越えて戦った。感動的な壮挙として歴史に記載する必要がある。

小稿では、日本軍に対する政治宣伝について言語・国境・文化心理という三つの側面から検討した。反戦同盟の考えや行動を、「同文同種」と称する中日両国の文化心理的な境界に

において分析した。反戦同盟の活動が戦局の結果を左右するまでになったとはいえないが、共産党の対敵政治工作の一環として日本語の教育や政策の調整、慰問袋の作り方にまで積極的に参与した。日本人の立場から様々な提案やアドバイスをして、政治宣伝の向上に努めた。1940年に八路軍の中の日本人の中で自発的投降するものは7%だったが、1942年には38%、1943年に48%にのぼったという^{*31}。このデータから見ると、反戦同盟は反ファシストの共同戦線の中で大きな役割を果たしたことが推察されよう。反戦同盟は、八路軍と日本兵士の境界に架かる橋であった。

注

- * 1 王庭岳は「抗戦大後方的日人反戦運動」『文史雑誌』（1989年第4期）において、反戦同盟の反戦運動を形成期、展開期、瓦解期という三つの時期にわけて、その組織や人員の構成などを詳しく検討した。黄義祥は「抗戦時期在華日本人的反戦宣伝活動」『広東社会科学』（1995年第4期）で、政策の変化の角度から反戦同盟が共産党の指導のもとに宣伝活動をした経緯を研究した。于景森は「抗戦時期党的対敵宣伝工作及其経験」『党史博采』（1995年12期）で共産党の対敵宣伝工作について考察し、その成功と失敗について反省した。杜玉芳は「鹿地亘と国統区的在華日人反戦活動」『石油大学学报社会科学版』（第20巻4期、2004年8月）で、国民統治区における鹿地亘を中心とする反戦同盟本部の活動を考察した。また「野坂参三与中国解放区の日人反戦活動」『理論月刊』（2005年第2期）で、日本共産党のリーダーである野坂と延安日本人労農学校の関係について、その経緯を検討した。なお日本側では主に回想録や資料の収集を中心に、鹿地亘編『火の如く風の如く』（講談社、1959年）、『反戦資料』（同成社、1964年）、『日本兵士の反戦運動』全11巻（同成社、1982年）などが発刊された。また研究論文集として『日中戦争下における日本人の反戦活動』（青木書店、1999年）が刊行されている。
- * 2 中共中央書記所編『六大以来党内機密文件』（上）863頁。
- * 3 中共中央書記所編『六大以来党内機密文件』（上）865頁。
- * 4 井上久士「中国共産党・八路軍の捕虜政策の確立」（前掲『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』）34-36頁。
- * 5 「劉国霖さんへのインタビュー」（同前『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』）273頁。
- * 6 于景森「抗戦時期党的対敵宣伝工作及其経験」『党史博采』、1995年第12期、21頁。
- * 7 防衛研修所戦史班『無形戦力思想関係資料第二号一支那事変ニ於ケル支那側思想工作ノ状況』JACAR Ref. C11110754900 支那事変の経験に基づく無形戦力思想見解資料（案）昭和15年9月、第0400画像目。
- * 8 同上、第0382画像目。
- * 9 中共中央書記所編『六大以来党内機密文件』（下）318頁。
- * 10 同上、322頁。
- * 11 同上、323頁。
- * 12 「劉国霖さんへのインタビュー」藤原彰『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』（青木書店、1999年）246-247頁。
- * 13 杜玉芳「野坂参三与中国解放区の日人反戦運動」『理論月刊』（2005年第2期）。
- * 14 前掲、于景森「抗戦時期党的対敵宣伝工作及其経験」、21頁。
- * 15 黄義祥「抗戦時期在華日本人的反戦宣伝活動」『広東社会科学』（第4期）23頁。
- * 16 鹿地亘編『反戦資料』（同成社、1963年）、290頁。

- *17 水野靖夫、鞆長金訳『反戦兵士手記』（解放軍出版社、1985年）100頁。
- *18 和田真一「生死岐路」、張恵才訳『从帝国軍人到反戦勇士』（中国文史出版社、1987年、日本語版『反戦兵士物語』）56-72頁。
- *19 中村哲夫「純真の国際友愛」『日軍ノ友』1942年4月11日付。
- *20 小林重一「国際愛情」『中共側新聞伝単等送附ノ件2』JACAR Ref.B02032461600、大東亜戦争関係一件／情報蒐集関係／北京情報（A.7.0）、第0212画像目。
- *21 「社論―捕虜に対する政策」（太平洋戦争史研究会編『華北における日本兵の反戦運動（一）』1974年）7頁。
- *22 前掲「劉国霖さんへのインタビュー」、275-276頁。
- *23 「在華日本人反戦同盟の宣伝活動」鹿地亘編、『反戦資料』（同成社、1963年）288頁。
- *24 「総政治部の敵偽軍宣伝工作に関する指示」前掲、『六大以来党内機密文件』（下）321頁。
- *25 「中共側最近ノ邦文宣伝ニ関する件」『中共側新聞伝単等送附ノ件2』JACAR Ref.B02032461300、大東亜戦争関係一件／情報蒐集関係／北京情報（A.7.0）、第0119画像目。
- *26 前掲「中共側最近ノ邦文宣伝ニ関する件」、第0121画像目。
- *27 劉鉄男「日本路反戦同盟晋察冀支部の一年間」（前掲『華北における日本兵の反戦運動（一）』）45頁。
- *28 「あなたの慰問袋に感謝する―日本人反戦同盟はこのように闘争している」（太平洋戦争史研究会『華北における日本兵の反戦運動（二）』1974年）42頁。
- *29 劉鉄男「日本路反戦同盟晋察冀支部の一年間」（前掲『華北における日本兵の反戦運動（一）』）45頁。
- *30 前掲、「あなたの慰問袋に感謝する―日本人反戦同盟はこのように闘争している」42頁。
- *31 小林清『在華日本人反戦組織史話』（社会科学文献出版社1987）8頁。